

## Lost character

『昨日午前4時21分に発生した台風19号ですが、勢力を高めながら西日本に向かって  
います』

『気象庁の発表によりますと、台風19号は××県西南市に上陸するとのことですよ』

『今回の台風の中心気圧は850ヘクトパスカル。これは伊勢湾台風よりもかなり強力で  
あり……』

『国立災害研究所の予測では、被害総額は数千億円になると……』

『臨時ニュースです。政府は先ほど非常事態宣言を発令しました』

『避難命令が出されたのは××県西南市ならびにその一帯……』

『この地域一帯にお住まいの方は、速やかに各自治体指定の避難所に避難を開始してくだ  
さい』

『続いては交通情報です。紀伊自動車道は河北インターチェンジを先頭に42キロの渋滞。  
県道5号線、県道47号線では自然渋滞が発生しています』

『政府筋の情報によりますと、避難を円滑に行うために自衛隊を派遣するとの……』

『衆議院予算委員会の中止に、野党内からは批難の声が上がっています』

『台風上陸まで5時間を切りました。本日は番組を中断し、報道特別番組をお送りします』

### 災害情報

『西南市一帯に竜巻警報が出されました。急な突風や雹に注意してください』

20××年 9月27日 10時42分

——西南市。

西日本の太平洋側に位置する人口10万人前後の地方都市である。町の中心部に位置する西南駅から同心円状に、市街、住宅街、郊外と立地している。その住宅街の中には、この町の避難所の一つである西南高校が存在した。

そして、この避難所に向かっている米原博人（まいばら ひろと）も、この高校に通う学生の一人だ。

「まったく、何で学校に避難するのに制服に帰る必要があるんだ？ かえって動きにくいぞ」

「仕方ありませんか。そういう校則ですから」

「わたしはお兄ちゃんの制服姿、好きだよ～」

「……………紫、さっきから聞こうって思ってたけど、何でお前も制服なんだ？」

「だって、お兄ちゃんはこの姿の方が可愛いって言ってくれたもん」

「だからって、こんな非常事態にまで制服を着るなよ……………」

彼は今、幼馴染の多賀由美（たが ゆみ）と中学生の妹である米原紫（まいばら ゆかり）と共に、学校に向かって避難をしている最中であつた。

台風上陸まで残り4時間半。

時間が経つごとに風の勢いが強くなってきている。紙などの軽いものは宙に舞い、掛け置き式の看板や電線は小刻みに揺れている。

「風が強くなってきていますね」

「ああ。でも、まあ、大丈夫だろ。たかが台風だし。」

「けど、もしものことを考えた方が…………」

「……………確かに。そんじゃ、早いとこ学校に向かうか」

博人たちは歩くスピードを上げた。両親たちが先に避難している西南高校へと向かって。

#### ニュース速報

『西南大橋で強風によるトラックの横転事故が発生しました。この影響で西南大橋は通行止め。また、迂回路である河下トンネルでは渋滞が発生しております』

20××年9月27日 10時56分

学校まで残り数百メートルの場所で、三人は信号待ちをしていた。周りには、同じように学校に避難する人々がいる。

智樹は、ここから見える学校を眺めていた。

あの場所へ行ったら、また普通の生活に戻るのか。何かつまらない人生だなと思いながら。

人間は平和な生活が続くと、非日常的なことが起こらないかと思ってしまう。

博人もそんな事を思っている一人であった。

しかし、彼はまだ何も知らなかった。これから起きる惨劇を。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

「……………」

「もう、お兄ちゃん！ 話聞いている！」

「博人君！」

「……………うん！？ ああ、悪かった。ちょっと考え事をしていて。どうした？」

「どうしたじゃありませんよ！ アレを見てください。アレです！」

「お兄ちゃん、早く逃げよう！」

「逃げようって、お前ら一体何を言っ……………」

博人は、由美が指差した先を見て驚愕した。そこには、目を覆いたくなるような光景が広がっていたのだ。

地上から空高くに向かって螺旋状に渦巻く巨大な黒い塊が、町を破壊しながらこちらに向かっていく。

高さ数千メートルであろうその物体は、竜巻であった。

木造建築の一部や自動車、さらには人までも宙に巻き上げながら、三人のいるところへ近づいてきている。

「逃げろ！ こっちへ来ているぞ！」

「あんなのに巻き込まれたおしまいだ！」

「奥さん、そっちに向かうのは危険です！」

「離して！ 息子が家にいるの！ 助けに戻らないと！」

現実的ではないその光景を見て、人々はパニックを引き起こし始めている。

それに追い打ちをかけるかのように、竜巻で飛ばされてきた一台の路線バスが近くの民家に突っ込んだ。バスの車内には、乗っていたと思われる乗客に死体が。

「きゃあああああああ！」

「どけ！ 俺が先に逃げるぞ！」

「殴りやがったなお前！」

「っんだとゴラ！」

「嫌だ！ こんなところで死にたくない！」

人が死ぬ光景を目の当たりにして、平常心を保てる人間なんていない。周りにいた人々は完全にパニック状態になっていた。常軌を逸する行動をする者も表れている。

由美はこの場所に長居するのは危険だと判断し、博人に声をかけた。

「博人君！ 私たちも早く安全なところへ！」

「安全な場所って、何処に！ 学校はあの竜巻が向かっている方向だぞ！」

「地下街！ 地下街だよ、お兄ちゃん！ あそこなら絶対安全！」

「地下街……………そうか！」

町の中心部に位置する西南駅近辺には、商業用の地下街が存在する。駅前を活性化させるために、市が数年前に建設したのだ。

地下に逃げ込めば竜巻に巻き込まれずに済む。アメリカのパニック映画でも、竜巻が起きたら地下へと避難していたのを博人は思い出す。

「ナイスアイデアだ、紫！ 駅に向かって走るぞ！」

そうこうしている内に、竜巻は博人達の目の前にまで近づいていた。数十メートル先に停車していた大型トラックが、今にも宙に舞おうとしている。

博人は、由美と紫の手を引いて住宅街の中を走り出した。竜巻に巻き込まれないように一定の距離を保ちながら。

しかし、竜巻の方が人間よりも進むスピードは速い。気が付けば、竜巻と並走する形となっていた。進路を変えずに進んでいたら、三人はもう既に竜巻に飲み込まれていたであろう。

竜巻で飛ばされてきた建物の破片を避けながら、細い路地をひたすら走り続ける。右、左と迷路のように入り組んだ住宅街を抜けて、三人は幹線道路に出た。

「はあ、はあ。お兄ちゃん……………ちょっと休ませて……………」

中距離走並の道のりを全力で走ってきたため、体の弱い紫の体力は限界に近かった。運動部所属の由美も息が上がっている。

このまま走るのは得策ではないと考え、博人は二人を休ませることにした。

ふと左手を見てみると、竜巻が道路を横切っていた。走行していた自動車が、まるでミニカーのごとく空に舞い上がっている。

ここも危険だ。

そう感じた博人は、二人を連れてゆっくりと歩き出した。

#### 災害情報

『西南市松宮地区で発生した竜巻は、東に向かって移動中とのこと。また、海岸沿いで新たな竜巻が発生したとの情報が入りました。市民のみなさんは速やかに安全な場所へ避難してください』

20××年 9月27日 11時14分

「おい……………嘘だろ。もう一個竜巻が発生したなんて聞いてねえぞ」

必至の思いで何とか駅前にまで到着した三人。しかし、彼らを待っていたものは希望ではなく絶望であった。

目の前から先ほどとは違う竜巻が迫ってきている。15階建ての駅ビルが竜巻に飲み込まれようとしていた。

「博人君！ 地下街は竜巻の方向ですよ！」

「……………違う場所を探すしかないな！」

と言っても、駅近辺で安全な場所を博人は思い付かない。

何処かないかと辺りを見渡してみると、3人がいる場所から少し離れたところで警察官が人々を誘導している。その先を見ると、地下駐車場の看板があった。

「あそこだ。地下駐車場へ行くぞ！」

「お兄ちゃん！ 前、前見て！」

「えっ！？」

紫の言葉を聞いて振り返って見ると、竜巻で飛ばされた列車がこちらに向かっていた。電柱や街灯をへし折りながら、もの凄い早さで飛んで来ている。

あんなのに直撃したら、一溜りもない。

「……クソっ！」

博人は、紫と由美の体を掴んで瞬時に地面に伏せた。その頭上スレスレを、重さ数十トンにする鉄の塊が通り過ぎていく。列車は数メートル先で浮力を失い、地面に落ちた。耳を塞ぎたくなるような轟音が鳴り響く。

「……………俺ら、死んでないよな」

「そう……みたい……………」

「死んでたら喋れないか……………。紫は怪我してないか？」

「うん……。わたしは大丈夫……………」

「みんな無事のような。ここにいても危険だ。早く非難するぞ」

博人は二人の手を引いて立たせる。そして、目的地である駐車場に向かって一目散に走った。

竜巻がすぐそこにまで近づいているせいか、時折体が持っていかれそうになる。

後ろを振り向くと、同じように駐車場に向かって走っている人々の中に、何人かが竜巻に飲み込まれていた。

「後ろは見るな！ 前だけ見て走り続けろ！」

博人はそう叫んで、走ることに集中した。

駐車場まで続く長い車列の間をすり抜けながら走る。300メートル、200メートルと目的の場所まで距離を縮めていく。

「早く！ 急いで中に！」

駐車場の出入り口には、若い警察官が必至に誘導をしていた。

博人達が駐車場内に入ると同時に、その警察官はすぐ近くにあったボタンを押した。ガシャガシャと錆びた機械音をさせながら、灰色のシャッターがゆっくりと降りてくる。

シャッターが完全に閉じたと同時に、竜巻が直撃した。

#### ニュース速報

『西南市で発生した竜巻の影響で、海上刑務所の一部分が崩壊したとの情報が入って来ました。多数の脱獄囚が出ている模様です』

20××年 9月27日 12時07分

どれだけの時間が経ったのだろうか。

博人は地面に座り込んで、ただ真っ暗な天井を眺めていた。隣には由美と紫が同じように座っている。今までの疲れが出てきたのか、由美は壁に背を付けてウトウトしていた。紫に至っては、博人の肩にもたれかかりながら完全に眠っている。

三人が逃げ込んだ先の地下駐車場には、他にも多数の生存者がいた。

停電であたりが真っ暗なため、何人ここにいるかは分からない。予備電灯と自動車のヘッドライトだけが、この場所を灯す僅かな光だった。

『西南市を襲った二個の竜巻ですが、気象庁の発表によりますと、どちらもF5レベルの威力だそうです。このレベルの竜巻が日本国内で発生するのは始めてで、二個同時に発生するのは極めて稀……』

自動車からの聞こえてくるラジオの音が、静かな駐車場内に鳴り響く。

助かった人々はみな、流れてくるニュースに聞き入っていた。話す余裕がないほど疲れ  
ているのであろう。

「知ってるか？ 河下トンネルも通行止めになったらしいぞ」

「事故でも起きたのか？」

「いや、老朽化でトンネル内に水が流入してきたらしい。多数の死者が出ているそうだ」

まだ喋る余裕がある者は、自分の持っている情報をひたすら周囲に拡散している。

このような状況になると、人々は悲観的なことしか言わなくなる。結果、恐怖だけが伝  
染していき、モラルハザードが発生する危険性がある。

この場所も、そのような危険を孕んでいた。

「大丈夫だったか、君たち？」

博人の側に一人の男性が近づいてきた。その男は、先ほど外で避難誘導をしていた警察  
官であった。

「ええ、まあ何とか……」

「それは良かった。それで、ご両親たちはここにいるのかね」

「いえ、両親は西南高校の方に避難しています。僕たちは、竜巻から逃げるためにこっ  
ちに」

「そうか……。ちょっと、隣に座っていいかい？」

「どうぞ……」

若い警察官は博人の隣に座り込む。

そして、ポケットの中から箱に入ったガムを取り出した。

「どうだい。君も一つ食べるか」

「あっ、どうも」



博人は差し出されたガムを貰う。ここは貰っておくのがセオリーだと思ったからである。

「さて、何の話から始めようか……………」

そう言って、警察官は銀色の包み紙を開けてガムを口の中に入れた。少し天井の方を見て、何を話そうか悩んでいるようであった。

「……………隣の二人は寝ているのか？」

「そう……………みたいですね」

先ほどまでウトウトしていた由美も、完全に寝入っていた。あれほどの距離を走ってきたのだから無理もない。

「なら、この話からするか。君たちの両親が避難している西南高校についてだが」

警察官は、少し思い口調で話を切り出した。由美と紫が寝ているのを確認したということは、博人もそれとなく察しがついた。

「……………竜巻に襲われたんですか？」

「ああ……。ついさっき入った情報だがね。学校は壊滅状態だったらしい。生存者は一人もいないそうだ」

「そうですか……………」

両親が死んだ。

あまりに唐突な出来事に、博人はその現実を身に染めて感じるができなかった。

涙も出なければ、悲しいといった感情も沸いてこない。

ただ、心の中にすっぼりと穴が空いた感じであった。

「その……………なんと云えばいいか分からないが。今は、君の隣にいる二人を守ってあげてことを最優先にしてくれ」

博人は隣で寝ている二人を見る。

彼に残されたものは、妹の紫と幼馴染みの由美だけだ。

何としてでも二人を守ること。それが今の博人にできる最大限のことであった。

「次の話だが、ちょっと耳を貸してくれないか」

「あっ、はい」

あまり声を上げて言いたくないことなのか、警察官は先ほどよりは小さい声で喋る。

「これは未確認の情報だが、刑務所の壁が竜巻の影響で崩壊したらしい。多数の囚人が脱獄したみたいだ」

「えっ！？ 本当なんですか？」

「ああ。だから、この駐車場に隣接するショッピングモールの道を確認している最中だ。今、外に出るのは危険だからな」

「おーい！ 道が確保できたぞ、みんなこっちへ来てくれ！」

地下にかん高い声がこだまする。声のした先では、初老の警察官の男性が懐中電灯を左右に揺らしていた。

駐車場で騒めきが起きる。一体どういうことなのか、他の生存者は理解できていないからだ。

「どうやら、道が確保できたみたいだな」

そう言って警察官は腰を上げる。ガムを先ほどの包み紙に入れて、近くのゴミ箱に捨てた。ポイ捨てをしないところが、まさに警察官の鏡だ。

「君たちも、速いところ向う側へ移動してくれ。ここも浸水の危険があるからな」

「あの、名前を覚えて貰っても」

「伊吹だ。西南警察署地域課所属の」

そう言い残して、伊吹巡査は生存者の誘導するために、博人たちの前から離れていった。

「…………お兄ちゃん……。何があったの……」

周りがざわつき始めたため、紫は目を覚ました。同じように、由美も寝ぼけながら辺りを見渡す。

「ここも危険みたいだ。他の人と一緒に避難するぞ」

ニュース速報

『西南市で発生した竜巻ですが、午後12時3分をもって二つとも消滅しました。県と西南市は、自衛隊に災害救助要請を出しています』

20××年 9月27日 12時35分

「おーい、誰かこっちに来てくれ！」

「惣菜や生ものはできるだけ避けて、長期保管ができそうなものを選ぶんだ」

「この中にも生存者がいるかもしれない。各場所を限なく探すように」

駐車場内に居た人々は数名の警察官の誘導の元、近くのショッピングモールへ辿り着いた。外に出るのは危険なため、救助が来るまでここで待つことになったのだ。

ここも竜巻の被害を受けたようで、ガラス張りの天井は割れて雨が中に入ってきている。各テナントの商品も、あちこちに散らばっている状態だ。

生存者達は数名のグループに分かれて、物資の調達や安全の確保を行っている。

警察という絶対的な規律があるおかげで、ここにいる人々のモラルは何とか守られているようであった。

「ここも危険だな……………。紫、あまりに近づくなよ」

博人たちのいるグループは各場所の安全確認を任された。同行しているのは、初老の警察官である大垣巡查長。

彼らは現在、連絡通路を渡った先にある食品売り場の方の確認作業を行っている。

「大丈夫だよ～。これぐらいの段差、登れるよ」

「あっ、コラ。勝手に上に乗るな」

食品売り場の中央部分は鉄筋が崩れ落ちていた。その場所の様子を見るために、近くまで来た三人。安全の確認をするため博人は一番低い鉄筋に登ったら、紫も同じように登ってきたのだ。

「紫ちゃ〜ん、そこは危ないですよ」

「お兄ちゃんがいるから大丈夫〜」

「俺がいても、絶対助けてやれるとは限らないぞ。ほら、手を貸せ」

そう言いながら、博人は紫の手を引いて鉄筋の上から降りる。

地面に降りたところで一人の警察官が近づいてきた。博人たちのグループを担当している大垣巡查長だ。

「楽しそうな声が聞こえてくると思ったら、君たちかぁ」

「あっ、すみません。こんな状況なのに——」

「いやいや。こんな状況だからこそ、君たちのような場を和ます存在が大切なんだよ」

大垣巡查長は笑って答える。

こんな絶望的な状況では、確かに雰囲気や和ませる存在が必要となってくる。彼はそのような道理を、十分に理解している人であった。

博人は大垣巡查長と話ながら、安全な場所の調査を続ける。

数十分ほどの時間が経過したある時、一発の銃声が鳴り響いた。

その場に居た全員の顔が張り詰める。

「何があった!？」

大垣巡查長は銃声のした方へ向かって走り出す。博人たちもその後が続いた。

## 災害情報

『台風19号上陸まで残り1時間を切りました。西南市一帯では大雨、洪水、波浪、暴風警報が発令されています』

20××年 9月27日 12時55分

悲鳴と銃声が聞こえた場所では、生存者が一箇所にまとめられていた。その周りを取り囲むように、囚人服を着たゴツイ体格の男が3名いる。一人は右手に散弾銃を、他の二人はボールと鉄バットを所持している。

「おいっ、てめらぁ！ 騒ぐんじゃねえぞ！ 少しでも声を出したら、コイツで蜂の巣にしてやっからな」

そう言って、散弾銃を持っている男は近くの壁に向けて一発撃った。飛び散った散弾が壁に無数の穴を空ける。生存者に恐怖心を植え付けるために威嚇射撃を行ったみたいだ。

「お兄ちゃん……………怖いよう……………」

「しっ！ 静かに。向うに気付かれるぞ」

何とか騒ぎに巻き込まれずに済んだ三人は、少し離れた商品棚から様子をうかがっていた。下手に動き回ると気づかれる危険があるからだ。

通路を挟んだ向う側には、大垣巡査長が同じように様子を確認していた。

警察官がいるといっても、3対1では当然勝ち目なんかない。それに、大垣巡査長が持っているものは官給品のリボルバー拳銃とステンレス製の警棒だけだ。散弾銃を持った相手に太刀打ちすることはかなり難しい。

「目的は一体なんだ！ ここには金目のモノなんかないぞ！」

そんな中、捕まっていた生存者の一人が勇気を持って声を上げた。その態度を見て、三人の囚人はお互いに目を見合って笑った。

「何がおかしい！ 私は当然の事を言っただけだぞ！」

「はははっ。いや～、こんなにも空気を読んでくれる人がいるとは思わなくてなァ。みんなもそう思うだろう？」

散弾銃を持った囚人は、声を上げた男性の近くにいた若い女性の前にしゃがみ込む。

「ひっ……！」

事務関係の服を着ているその女性は、恐怖の余りに目は見開いて涙目となっていた。まるでそれを狙っていたかのように、囚人は女性に質問する。

「なあ、あんたもそう思うだろう？」

「はっ……………はいっ！」

恐怖に耐えきれなくなったその女性は、声を嗄らしながら答える。その返事を聞いて三人の囚人は再び声高く笑った。

「はははっ、やっぱりあんたもそう思うか。なら、コイツは蜂の巣決定だな」

「ひいっ」

囚人は散弾銃の銃口を男性に向けて引き金に指をかけた。  
いつでも引き金が引かれてもおかしくない状態。男性はすでに死を覚悟していた。

「う～ん、このままじゃあ、何か面白くねえな～。おい！ 何か他に面白い殺し方ないか？」

「その女に引き金を引かせましょうぜ、兄貴」

「おっ！ いい考えだな。よし、立て！」

囚人は先ほどの女性の腕を引っ張り立たせる。そして、その女性に散弾銃を持たせた。

「特別に俺が銃を撃つ方法を教えてやろう。ストックを肩に当てて、持ち方はこう。そして、そのまま引き金を引くんだ。こうやって」

——パァンン。

食品売り場に三度目の銃声が鳴り響いた。

「二人とも、見るんじゃない！」

博人は、由美と紫のその光景を見せないように体で隠した。

向かい側にいる大垣巡查長も、あまりの残忍さに怒りを抑え切れないでいる。ホルダーにぶら下げている拳銃を取り出し、いつでも飛び込めるような態勢を取っていた。

「大垣さん！ 今飛び込むのは危険です」

「し、しかし。警察官である私が止めに入らなければ……」

「もう少し様子を見てからにしましょう！ 彼らの興奮が収まってからの方が……」

囚人たちに聞こえないように小声で遣り取りをする二人。博人は大垣巡查長が無謀なことをしないように必死に静止させる。しかし、そんなことを言う博人にも、この場を打開する策なんて何もなかった。

#### ニュース速報

『政府は西南市に続く交通網を全て閉鎖しました。詳細な情報はまだ入ってきていませんが、大規模な暴動が西南市内で発生している模様です』

20××年 9月27日 13時27分

時間だけがただ黙々も過ぎていく。これといった解決策が思い付かないで、20分もの時間が経過した。

以前、状況は何も変わっておらず、緊迫した雰囲気だけが漂っていた。

そんな中、博人の後ろにいた由美が何かを発見した。

「あの、博人君。あれ使えるんじゃ」

由美が見つけた物。それはレジカウンター近くに転がっていた消火器であった。竜巻でどこからか飛ばされてきたものみたいだが、まだ使えそうだ。

その消火器を眺めている博人に、一つのアイデアが浮かぶ。囚人たちの近くであの消火器を噴射すればいいのではないかと。

排除することは不可能だが、相手の目眩ましぐらいならいけそうだ。

博人は早速、少し離れた先にいる大垣巡查長に声をかける。

「大垣さん！ あの消火器見えますか」

「ああ。レジの近くに転がっている業務用のデカイやつだな」

「あの消火器を上手いこと使いませんか」

「どうやって？」

博人は、先ほど思いついた考えを大垣巡査長に説明する。かなりのリスクを伴うが、彼らにできることはこれぐらいしかなかった。

「……………確かに、それが一番いい方法かもしれない。よし、君の考えを採用しよう」

「良かった。なら、僕が消火器の近くに行くので…………」

「いや、君は彼女たちの側に居てやってくれ。こんな危険なことを、子供がする必要はないからな。いいか、私が飛び出したら一目散に出口に迎うんだぞ」

「しかし……………」

「老いぼれの最後の仕事だ。華やかに散って終わらせてくれ」

そう言い残して、大垣巡査長は商品棚の間をゆっくりと進み始めた。なるべく物音を立てないように、中腰になりながら。

博人たちは商品棚の影から、大垣巡査長が無事にレジカウンター近くまで進んでいることを逐次確認する。

このまま行けばなんとかなる。しかし、世の中はそんなに甘いものではない。

消火器まであと数歩のところ、巡査長が持っていた無線機が鳴った。

「誰だ！？ そこにいるのは！」

囚人たちに見つかる。彼らは持っていた鈍器や散弾銃を身構える。しかし、リーダー格の男は散弾銃に弾を入れ込むのに手間取っていた。

飛び出すには今しかない。そう思った大垣巡査長は瞬時に消火器の近くに移動して、黄色の安全ピンを引き抜き、消化剤を噴出した。

「クソ、何だこれ！？ 消化剤か！？」



「痛てえ！ 目が。前が見えない！」

白桃色の消化剤が囚人たちを襲う。  
それがチャンスだと思い、博人は紫と由美の手を引いて出口まで駆け出した。  
捕まっていた他の生存者も一斉にその場から逃げだす。  
消火器作戦は見事成功に終わった。

#### 災害情報

『西南市に台風19号が上陸しました。今まで見たことのない暴風が吹き荒れています。  
決して屋外には出ないでください』

20××年 9月27日 13時49分

連絡通路を渡り、ショッピングモールの本館へ移動する博人と他の生存者。  
本館まで辿り着けば助かる。  
そんな淡い期待の元、彼らは全力で走っていた。  
しかし、その希望もまるで空に上がったシャボン玉のように儂く散って終わった。

「なんだ……………これは……………」

半開きになった自動扉を抜けたその先は、絶望的な光景が広がっていた。  
安全だと思っていた本館も、囚人たちに占拠されていたのだ。  
そこには、モラルと呼ばれるものは存在しない。生存者たちの中には、囚人に加担して  
いる者も現れていた。

「クッ、逃げるぞ」

ここにいても助からない。そう思った博人は、紫と由美の手を引いて出口にまで向かう。  
その道中、目の前に折りたたみナイフを持った囚人が博人の前に立ち塞がった。

「へへっ。兄ちゃん、いい女連れてるな。俺にも一人分けてくれよ」

囚人はナイフをチラつかせながら、ゆっくりと近づいてきている。博人は後退りしながら、周りに何かないと探す。しかし、小さな通路には武器となりそうな物は何も落ちて

いなかった。

「逃げるなよ～。そこの女を渡せば、何も危害は加えたりしないって」

囚人との距離は確実に狭まっている。このままでは遣られると判断した博人は、とっさにポケットの中に手を入れ込んだ。そして、先ほど貰ったガムを囚人にめがけて投げる。

「うおっ!？」

投げられたガムに驚いて、囚人は一瞬怯む。その隙に、博人は囚人に向かって勢いよく体当たりをした。

強い衝撃を受けた囚人は2、3歩後ろによろける。その間に、博人は相手が持っていた折りたたみナイフを奪い取り、囚人に刃先を向けた。

「形勢逆転だ。さあ、どうする？」

「チッ、覚えてやがれ！」

捨て台詞を残して、囚人は博人たちの目の前から姿を消した。

「……………ふう」

「大丈夫ですか、博人君！」

何とか囚人を撃退した博人。安心して気の緩みが出たのか、床に座り込んだ。その隣に由美が駆け込む。

由美は、博人に怪我はないかと入念に体を確認する。

「怪我はしていないから平気だ。それよりも、紫はどこへ？」

「大垣さんと呼んでくるって言って、飛んで行っちゃったけど…………」

「本当か!？ あいつ一人で……………」

「きやあああああ！」

ショッピングモール内に聞き覚えのある悲鳴が聞こえた。その声を聞いて、博人の表情が一瞬にして曇る。

「まさか、この悲鳴……………。紫！？」

博人は居ても立っても居られず、悲鳴の聞こえたところへ駆け出した。  
崩れたテナントとテナントの間を抜けて、大きな広場に出る。  
休憩用のベンチの近くには4人の囚人と、手錠を掛けられている紫がいた。

「助けて！ お兄ちゃん！」

「へえ、あんたがコイツのお兄さんか。さっきはよくもやってくれたな」

4人のうち一人は、さきほど博人が撃退した囚人であった。右手には大型のサバイバルナイフを手をしている。

「……………紫を離せ！」

博人は奪った折りたたみナイフを囚人たちに向ける。  
しかし、囚人たちはそれをあざ笑うかのように銃火器を取り出した。  
一人はリボルバー拳銃を、他の二人は元折式の散弾銃を持っていた。

「どうする、兄ちゃん？ ここで俺らとやり合うか？」

「残念だけど、君の知り合いの爺さんはもう来ないぜ。この拳銃、その爺さんから貰ったからな」

囚人たちがいる場所から少し離れた場所で、一人の男性が倒れていた。警察官の服を着ているその男性は大垣巡査であった。辺りには飛び散った血痕と、散弾の薬莖が転がっている。

「なあ、兄ちゃん。一つ提案があるんだが」

「……………何だ！」

「今すぐ俺らの前から姿を消してくれれば、今回だけは命は助けてやろう。どうだ？ なかなかいい案だる？」

「ふざけるな！ 今すぐ紫を離せ！」

「いいのか、そんなことを言っても。俺らはいつでもお前を殺せるんだぞ。それに、辺りを見てみる」

博人は自分の周りを見渡す。そこには、他の囚人が博人と由美を取り囲んでいた。

「今なら、兄ちゃんの彼女だけは助けれるぞ。さあ、どうする？ このまま死を選ぶか。それとも、彼女だけでも助けるか？」

囚人たちは笑いながら博人に問いかける。

博人はそんな囚人たちを睨みながら、必死に頭を回転させる。

紫だけは捨てていけない。三人が無事助かる方法は何かないのかと。

そんな博人の様子を見て、由美はある決断をして声を上げた

「あの！ 私が彼女の変わりになります。だから、紫ちゃんと博人君を解放してくれませんか？」

「おいっ！ どういうことだ由美！？」

「はっはっはっ！ ドラマみたいな展開になってきたな！」

由美が、人質の代わりになると囚人たちに申し上げた。そのことが面白かったのか、周りにいた囚人たちは大声で笑う。

由美を止めるように博人は必死に目で合図を送るが、由美の決心は固かった。ゆっくりと囚人たちのいる方へ歩く。

そんな由美の態度を見てか、囚人たちは少し真剣な趣で答えを出す。

「……………いいだろう！ その条件を飲もう！ まず、俺らがこの子を放す前————。うん？ なんだこの音？」

ショッピングモール内に異様な音が響く。まるで、飛行機が着陸するような騒音が。

その音は徐々に大きくなっている。

そして、ガラスが割れる音と共に建物内が大きく揺れた。

その場にいた全員が天井を見る。そこには、民間用のヘリコプターがガラス張りの天井を突き破って、広場に落ちてきていた。

「嘘だろ!？」

囚人たちはその光景に驚いて動けないでいた。

一方、博人は由美を抱えてその場から走り出す。コンマ数秒の時間の後、ヘリがショッピングモール内に墜落した。

#### 災害情報

『局地的な豪雨により、西南川の防波堤が決壊しました。市街に濁流が流れる危険性があります。市民のみなさんは高い建物に避難してください』

2013年 9月27日 14時08分

「……………怪我してないか、由美」

「うん。ちょっと足を挫いた程度かな」

ヘリが墜落する前に、何とかその場から離れることができた二人。運よくヘリの下敷きになることだけは回避できた。しかし。

「……………はっ!？ 紫! 紫は!？」

墜落したヘリが見事に道を塞いでしまっていた。博人たちのいる方から、向う側は見る事ができない。

「クソっ! 何としてでも助けてやるぞ。紫!」

「止めてください、博人君! そっちに近づくのは危険です!」

ヘリを乗り越えてでも助けにいかうとする博人。それを由美は必至に止める。なぜなら墜落したヘリから火の手が上がっていたのだ。その周りには燃料が漏れ出している。

「放してくれ！ 俺は何としてでも行くぞ」

「迂回路が絶対にあるはずですよ。そっちを使いましょう！ ここで博人君が死んだら、元も子もありませんよ！」

「……………分かったよ。早速、他の道を」

「……ほう、お前ら生きてたのか。これは殺し甲斐があるな」

由美に諭されて他の迂回路を探そうとした時、墜落の衝撃で崩れたテナントの中から別の囚人が出てきた。

この囚人も、鉄パイプという打撲系鈍器を所持している。

「次から次に、全く！ 逃げるぞ、由美！」

博人は由美の手を引いて急いで走り出した。

ニュース速報

『民放テレビ局の取材ヘリが、強風に煽られて墜落した模様です。現在、ヘリのパイロットとスタッフ4名との連絡が取れていません』

20××年 9月27日 14時15分

「まったく。ヘリが突っ込んでくるなんて、海外のアクション映画かよ」

博人たちがいた場所からヘリを挟んで反対側では、助かった囚人5名が集まっていた。他にいた囚人は全員、ヘリの下敷きになってしまったのである。

リーダー格のショットガンを持った男は、煙草に火を点けながらヘリを眺める。

「あの坊主たちは死んだよな。面白くねえな」

「リーダー。ショーは終わったことですし。早速、この子をやりましょうぜ」

部下と思われる太った囚人が、ニヤニヤと笑いながら紫の腕を掴んで立たせる。紫は必

至に囚人の手を振り解こうとしたが、男性と女性との力の差に為すすべもなかった。

その様子を見て、リーダー格の男は煙草を吸いながら部下を静止させる

「バカッ。勝手に何意気込んでんだよ」

「へへっ、すいません。生身の女子中学生なんで、気分が上がって上がって」

「盛んだ豚みてえな奴だな。いいか。まだ手は出すなよ。俺が下味を加えてやるからな」

そう言って、リーダー格の男は煙草を消して紫の元に近づく。

紫は恐怖の余り目を瞑っていたが、銃口を喉に当てられたため目を開けた。そして、リーダー格の男は紫の耳元で悪魔のように囁いた。

「よく聞け。今から俺らと楽しいことをしたいか。それとも、この銃で喉を真っ二つにされたいか。どっちから選べ。まあ、大概の奴は前者を選ぶが」

「嫌だ！ わたしはどっちも選ばない！ きっと、お兄ちゃんが助けてくれるもん！」

「まだそんなこと言ってんのか？ お前に兄さんはここには戻って来ない」

「嘘だ！ お兄ちゃんは必ずわたしを助けに……」

———パァァン。

銃声が辺りに響く。リーダー格の男は、天井に向けて散弾銃を一発発砲した。

撃たれたと思った紫は目を見開いて、言葉を発することもできなくなる。

「……………よく考えてみろ。お前の兄さんはあの女を連れて向う側に逃げた。これがどういう意味かを分かるだろ？ お前は捨てられたんだよ」

「……………違う」

「まだそんな強がり言ってるのか。もう諦めちまえよ。私はお兄ちゃんとあの女に捨てられたんだとよお」

男は言葉巧みに紫を追い詰めていく。

紫の精神は徐々に蝕まれていった。頭の中に渦巻く疑念や絶望がそれに拍子を掛ける。

なぜ、お兄ちゃんは助けにきてくれないのか。私は本当に捨てられたのではないかと。  
そして、紫の目から光が消えた。  
その姿を見て、男は手元に用意していた注射器を紫に腕に打つ。

「リーダー。その注射器の中に入っているモノは？」

「気分がハイになるクスリだ。コイツも、苦痛だけじゃあ可哀そうだからな」

「なるほど。リーダーは考えてますね」

「世の中、考えて生きていかないと成功しないからな。よし、下準備は終わった。後は好きにヤッてもいいぞ」

リーダー格の男は紫の元から離れて近くのベンチに座る。まるでひと仕事終わったかのような趣で、煙草に火を点けた。

一方、紫の元には太った男が代わりに近づく。

「12年ぶりの生身の女だ。今日は一日楽しむぞお」

太った男は意気込みながら、自分のズボンに手をかけようとする。

彼女はここで襲われる。

誰しもがそう思っていたところで、囚人たちに予期せぬ事態が起きた。

「ぢではっ！」

太った男が断末魔を上げて、床に倒れ込んだのだ。

一体何が起きたのか。

誰も状況が掴めていない中、笑声を上げながら紫がゆっくりと立ち上がった。太った囚人が持っていた拳銃を手にししながら。

「ちっ。薬が多すぎたか」

リーダー格の男は隣に置いてあった散弾銃に手を伸ばしたが、その前に紫が一発発砲した。弾は男に右腕に当る。

「ぐっ、あう！」



男は激痛のあまり床に倒れ込む。その間に、紫は近くにいた二人にめがけて撃った。一人は頭に、もう一人は胸を撃ち抜かれて倒れる。

このままでは自分も殺される。そう思った男は、ベンチの上にある散弾銃を取ろうと左手を伸ばすが。

「ぐあああつ！」

撃たれた右腕を紫に勢いよく踏まれる。今までに感じたこのない痛みが男の体に走った。

「リーダー！ クソッ、この野郎！」

ベンチの近くで待機していた囚人が散弾銃を構える。紫に向けて引き金を引いたが、それよりも先に紫は倒れた男の襟元を掴んで盾にした。

散弾がリーダー格の男の胸に命中する。

囚人は誤ってリーダーを撃ってしまったことに動揺している。

その隙に、紫は残った一人に向けて拳銃を撃った。

#### ニュース速報

『政府は自衛隊の救援活動を一時中断するように呼びかけています』

20××年 9月27日 15時36分

「無事ですか二人とも」

薄暗いホテルのロビーの中で、博人と由美はイスに座って休息を取っていた。二人の前には、駐車場で会った伊吹巡査がいる。

「ええ。何とか囚人は撒けたんですけど、妹の紫が……………」

囚人からの執拗な追跡から逃げていた二人。

屋外に出て囚人からの追跡を振り切った二人だったが、外は大荒れの状態でまともに歩くこともできなかった。

外にいるのも危険だと判断した博人は、近くのホテルに逃げ込むことにした。そこで、伊吹巡査と偶然再会したのだ。

「紫ちゃん……………。私があの時、止めていたら。」

「由美は何も悪くない。俺が、何もできなかったのがいけないんだ……」

二人は、紫を置いて逃げてしまったことに罪悪感を抱いていた。怒りや悲しみといった何ともやるせない気持ちだけが募っていく。

そんな二人の様子を見て、伊吹巡査は優しく言葉を投げかける。

「いいや。君たちは何も悪くない。悪いのはこんな状況で悪事を働いた脱獄囚だ。そんな絶望的な状況から二人は助かったんだ。それだけでも、今は感謝しないと。それに、30分後に台風の目の中に入る。それを見越して救援のヘリがこのビルに来てくれるはずだ。まだ希望を捨てるんじゃない」

その言葉を聞いて博人の心は少し軽くなった気がした。絶望の中から生まれたわずかな希望が、今を生きようという気持ちにさせてくる。しかし、妹である紫を見捨てたことに博人は自分を許せる気にはなれなかった。

そんな中、玄関の扉が開く音がホテルの中に響いた。誰かがホテルの中に入ってきたのだ。

屋内は薄暗いので、博人たちがいる場所から確認することはできなかった。なので、伊吹巡査が玄関の元へ駆け寄る。

「大丈夫ですか。怪我とか———」

確認しに行った伊吹巡査の声が途切れる。そして、まるで魂が抜かれたかのように床に倒れ込んだ。

よく見ると、倒れた伊吹巡査の胸元にはナイフが突き刺さっている。そう、伊吹巡査が入ってきた何者かに刺されたのだ。

先ほどの囚人か。

そう思って、博人は近くに置いてあった懐中電灯を持って入って来た人物を照らした。薄暗いエントランスに照らされるその人物を見て、博人と由美は驚きを隠せなかった。なぜなら、伊吹巡査を刺したその人物は。

「……………紫!？」

博人の妹である紫だからである。

着ていた制服にはたくさんの返り血を浴びていて、結んであった髪の毛もほどけている。

よっぽど酷い目にあったということが、簡単に想像できた。

それに、紫は警察が使うポンプアクション式の散弾銃と、大型のサバイバルナイフを所持していた。

博人は、今の状況を整理することができなかった。

紫が無事であったという安堵する気持ちがある反面、なぜ人を殺したのかという疑念が頭の中に生じたからである。

「紫、無事だったのか！ いや、どうして伊吹巡査を殺した！」

博人はとりあえず言葉を投げかけてみた。今、何が起きているのかをはっきりさせるために。

しかし、紫から返ってきた言葉は予期せぬものだった。

「……………わたしから、お兄ちゃんを取る者は許さない」

「紫。何を言って——」

「殺してやる殺してやる殺してやる——」

意味不明なことをいいながら紫は散弾銃を構える。そして、博人の隣にいた由美に銃口を向けた。

「伏せろ！ 由美！」

紫が引き金を引く前に、博人は由美の肩を掴んでソファの後ろ側に倒れ込む。その直後、発砲された散弾がソファに無数の穴を空けた。

紫は続けて2発、3発とソファに向かって散弾銃を撃ち続ける。その行動に、ためらいと呼ばれるものはなかった。

ソファの後ろ側に隠れている博人と由美は、なんとか紫を説得しようと試みる。

「紫！ いい加減にしろ！ いくらなんでも冗談がキツすぎるぞ！」

「紫ちゃん！ 私が悪かった！ この通り謝るから、もう止めて！」

「あっはははは！ お兄ちゃんはわたしのもの！ 絶対に渡さない、渡さない！」

紫に博人達の言葉は届いていないようだった。笑い声を上げながら立て続けに散弾銃を撃ってくるその姿は、もはや一種の殺人鬼であった。

「クソっ！ 紫、どうしちゃったんだよ」

どうすることもできない博人はやり切れない怒りを床にぶつける。妹がこんなことになるなんて、とても受け入れ難いことだからだ。

その様子を見て由美は博人の手を握る。そして、ある提案をする。

「博人君、紫ちゃんの狙いはどうやら私みたいです。だから、私が囿になって、その隙に博人君は逃げて——」

「いや、そんなことはさせない！ 三人でここを脱出するって言っただろう。誰も死なせたりはしない」

「博人君……………」

散弾銃を撃っていた紫の攻撃が止んだ。弾切れになってみたいで、弾薬の補充をしている。隠れているソファの強度もそろそろ危なくなっていた。

ここから出るには今しかチャンスがない。そう思った博人は、由美の手を引いて階段に向かって走り出した。

二人が一斉にソファから飛び出したのを見て、紫は弾の補充を止めて散弾銃を構える。

「お兄ちゃんをわたしから取るなっ！」

紫は大声で叫びながら、走っている由美に向かって撃つが、柱や壁が障害物となって当たらない。

階段まで何とか走りきった二人は、壁を盾にしてエントランスを覗き込む。

紫は先ほどまで持っていた散弾銃を床に捨てて、肩に背負っていたカバンから小型のアサルトライフルを取り出した。自衛隊が使っている国産品の物だ。

マガジンをセットすると、紫はゆっくりと階段に向かって歩き出した。

「お兄ちゃん～！ どこにいるの～！ わたしは絶対離さないからね～」

「あいつ、あんなのどこから拾ってきやがった！？」

こちらに来ていることを確認した博人は、由美の手を引いて階段を駆け上がる。  
なるべく後ろに付かれないように、ある程度上ったら身を隠しながらホテルの最上階を目指す。

#### ニュース速報

『西南市一帯が台風の目に入りました。風も比較的穏やかになっており、救援活動が再開されています』

20××年 9月27日 15時53分

「あははっ！ お兄ちゃん～！ 隠れても無駄だよ～！」

屋上手前のフロアで、博人と由美は足止めを食らっていた。

階段を上り最上階にまで来たのはいいが、紫が先回りをしてこのフロアを徘徊していたのだ。しかも、屋上に続く階段の手前を重点的に。

口の字型になった廊下を上手いこと使って見つからないようにしているが、このままでは罅が明かない。

そこで、博人はある作戦を切り出すことにした。

「よし、最後にもう一回作戦を確認するぞ。まず、由美が紫に気を引き付ける。その間に俺が紫の後ろに回り込んで銃を奪う。分かったな」

由美は無言で首を縦に振る。

一方、紫は二人の近くに近づいていた。アサルトライフル特有の接触音が聞こえてくる。

「それじゃあ、作戦開始だ」

そう言うと、博人は急いで廊下を走り出した。一秒でも早く紫の背後に回り込めるように、全力で廊下を駆け抜ける。

2回目のコーナーを曲がったところで、廊下に銃声が響き渡った。紫が由美を発見したのだろう。博人は由美が無事であることを願って走り続けた。

廊下をちょうど一周した先で、紫がいるのを確認する。まだ、博人が後ろから来ていることに気が付いていない。

「お兄ちゃんに付きまとう人は許さない！ 絶対に殺す！」

「止めろ！ 紫！」

博人は勢いよく紫に飛び掛かった。

紫の持っているアサルトライフルを掴んで、奪い取ろうと腕に力を入れる。それに対して紫も必至に抵抗をする。もがき合いの中、時折引き金に指が接触して天井や壁に穴を空けていく。

「放してお兄ちゃん！ そいつ、殺せない！」

「人を殺すなんてことはもう止めろ！」

「どうして！ お兄ちゃんはわたしのこと嫌いなの！？」

「ああ！ こんなことをする紫は、大っ嫌いだ！」

「そんな————」

紫は急に抵抗する力を弱める。そのため、今まで均衡に釣り合っていた力が他方に分散して、博人と紫はバランスを崩した。

「うおっ！」

「きゃあ！」

ガラスの割れる音と共に博人は床に倒れ込んだ。受け身を取れなかったので、顔面と腹部に鈍い痛みが走る。

「痛う……。あれ、紫は——」

辺りを見ると一緒に倒れたはずの紫の姿が見えない。もしやと思い、窓の方を見てみると。

「博人君……。紫ちゃんが……………」

窓ガラスは割れていて、その近くにはアサルトライフルが落ちていた。

バランスを崩した際、紫は勢い余って窓ガラスを突き破り、20階のビルから転落したのだ。

博人は窓の近くに行き確認するが、先ほどまでの風雨と霧のせいで下まで見ることができない。

「紫……………」

紫は死んだ。

自分が紫を殺したのだ。

その言葉だけが、博人の頭の中をひたすら交差していた。

#### 災害情報

『本州に上陸した台風19号ですが、次第に勢力を弱めています。気象庁の予測では、3時間後には温帯低気圧に変わるとみられております』

20××年 9月27日 16時14分

ホテルの屋上にはヘリが一機停まっていた。ヘリの機体部分には大きく消防庁と描かれている。博人と由美が屋上に出るとすぐに、ヘリの中から消防士と思われる二人の男性が出てきた。

「大丈夫ですか！？ 怪我などはしていませんか？」

「はい。私は無事ですが、彼は精神的な方が……………」

由美に肩を支えられて屋上まで来た博人。

紫を死に追いやったのは自分だと責め続けたため、まるで氣力を奪われてしまったかのようにゲッソリとしていた。

「他に生存者は居ますか？」

「いいえ。私たちだけだと思います」

「了解しました。すぐに出発するので、ヘリに乗ってください。あっ、彼は私たちが運びます」

由美に代わって、一人の消防士に肩を担がれながら博人はヘリに運ばれる。

二人を後部座席に乗せると、ヘリはメインローターを回転させながら離陸する準備を始める。特有のプロペラ音を鳴らしながら、ヘリは徐々に上昇をしていく。

広いスペースのある後部座席に座っている博人は、ひたすら竜巻で壊滅した街並みを眺めていた。

これで全て終わった。

そう思った博人はゆっくりと目を閉じる。

その途端。

ヘリは大きく左右に揺れた。まるで、誰かがこの中に飛び込んできたように。

博人は目を開けてヘリの中を確認する。すると、半開きになった扉から一人の少女がヘリの中によじ登ろうとしていた。

その少女は、ビルから転落したはずの紫であった。

「あっははは！ お兄ちゃん、わたし気が付いたの～。お兄ちゃんが死んじゃえば、わたしの物になるってね。だから、死んでね。お兄ちゃん！」

そう叫びながら、紫は包丁を手にして博人に襲い掛かる。

博人は、でたらめに包丁を振り回してくる紫の攻撃を必至の思いで避ける。

狭いヘリ内での戦い。壁側に追い詰められたら一貫の終わりだ。

「正気になれ、紫！ みんな一緒に助かろうぜ！」

「お兄ちゃんはわたしだけのもの。お兄ちゃん以外、わたしは何も要らない！」

紫に何度も何度も説得を試みるが、一向に効き目がない。

そこで、博人はあることに気が付いた。

「まさか……………あの囚人に変な薬を打たれたのか！？」

そう考えれば今までの紫の行動に合点がいく。

博人は紫の攻撃をかわしながら、どうにか包丁を奪い取ることができないか考える。あの包丁さえなければ、全てが丸く収まるからだ。

考えに考えた末、博人はヘリの後部座席近くに常備されていたボールを手にした。

そして、紫が振りかざした包丁をボールで受け止める。



「お兄ちゃん……………。なかなか頑張るね…………」

「紫もこんなに力があるとは、思ってたなかった…………」

お互いの力が、ナイフとバールの接触面に集中する。やがて力は抑え切れなくなり、ホームランを打ったかのような音がして、ナイフとバールは宙に舞う。

ナイフは運転席の方に飛んでいき、バールは扉付近にいた由美の元へ飛んだ。

バールを避けようとしやがみ込んだ由美は、バランスを崩してヘリが落ちそうになる。

「由美、掴まれ！」

博人は由美の元に駆け寄るが、ヘリが大きく左右に揺れた。結果、博人までもがバランスを崩してヘリから落ちかける。

その時、博人は思った。扉を完全に閉めておけばよかったと。

下を見ると自動車がまるでアリのように見える。ここで落ちたら一溜りもないだろう。

「…………絶対放すなよ！」

博人は左手で由美の腕を握り、右手でヘリ内のポールを掴む。まるで映画のワンシーンのように。

その状況の二人を見て、紫は不気味な笑顔を見せる。

「うふふっ。これで、お兄ちゃんはわたしの…………」

紫はゆっくりと近づいてくる。

これはもう駄目だ。

博人は死を覚悟した。ここで自分たちは終わるのだ。これは神が与えた俺達の運命なんだと。

博人は諦めて、掴んでいたポールを放そうとした時。

「えっ！？」

ヘリが大きく真横に揺れた。機体が右90度に傾く。

ポールを掴んでいた博人は、由美とともにヘリの機内へと戻される。一方、何も掴んでいなかった紫はヘリの外に放り出された。

一瞬の出来事で、二人は何が起きたのか分からなかった。

ただ、自分達は助かったということだけは何とか理解できた。

「大丈夫かい。お二人さん」

へりのパイロットが二人に声を掛ける。彼の匠な操縦テクニックで、二人は何とか命拾いをしたのだ。

「私たち、助かったんだよね」

由美は博人の手を握って、優しい口調で問いかける。博人は由美の手を力強く握り返して答えた。

「ああ。俺達は生き残ったんだ」

へりは嵐の中を抜けて、オレンジ色に染まる太陽に向かって飛んでいく。  
まるで、明日に向かって歩くかのように。

～完～